

# 来ぶらり 40

## 合縁・奇縁・地縁

— 目白・池袋界隈の作家たち —

運用課長 境 経夫

《麦ばたの 垂り穂のうへのかげ見えて  
電車過ぎゆく 池袋村》(若山牧水)

明治36年、豊島線池袋駅ができると、田畑の広がる周辺の寒村は徐々に郊外住宅地へと変貌を続け、戦前・戦後にかけて作家、芸術家が群れつどい、雑司ヶ谷文化、池袋アトリエ村など独自の風物を生み出した。今回は15号に続いて、目白・池袋界隈に縁のある作家を紹介しよう。

まず、華麗な美文で明治文壇を風靡した大町桂月。晩年、目白台で執筆の傍ら全国名勝への旅に明け暮れ、膨大な紀行文と各地の記念碑で有名。「赤い鳥」主宰の鈴木三重吉が学習院の馬場で乗馬に励んだことは前回触れたが、自らも日本騎道少年団を創立、指揮したことを知る人は少ない。二児を病魔で失った小川未明は、大正3年家族の健康のため雑司ヶ谷、目白の女子大裏などに転居、「牛女」「赤い蠟燭と人魚」などの名作童話を世に問うた。異色なのは朝日の記者時代、池袋界隈のサツ回り中“説教強盗事件”に遭遇、それが縁で山窩文学の新ジャンルを拓いた三角寛で、「山窩社会の研究」なる論文で文学博士号も受けた。彼はまた、終戦後間もなく池袋東口に“人生坐”を創業しフランス名画を上映、現・文芸座にその伝統を引き継いだ。昭和10年代に入ると、池袋から長崎町にかけてアトリエ付の貸家集落が出現、無名の芸術家たちが歓楽街のネオンの中を徘徊した。その一人で界隈のぼろアパートを転々、血を吐

いて死んだプロレタリア詩人小熊秀雄は、《池袋モンパルナスに夜が来た 学生、無頼漢、芸術家が街に出る》と歌った。文壇の大御所・菊池寛は大震災後、雑司ヶ谷の金山に移り、文芸春秋の創刊一周年号を編集。戦後、公職追放の翌年に同町(現記念館跡)で死去、葬儀参加者は7千名におよんだ。偶然だが、推理作家の江戸川乱歩と大下宇陀児が昭和9年の同じ日に池袋の西口と東口に転居、池袋を第二の故郷に住みなし、戦後1年違いで他界したのは奇しき縁と言われる。目白駅近くの下落合に住み続けた船橋聖一は、NHK大河ドラマ第1作「花の生涯」で知られる。

さて、次頁特集の二作家は別にして、数奇な運命をたどり後半生を西池袋で終えた大正の闇秀歌人・柳原白蓮、童謡「赤とんぼ」の作詩者・三木露風、雑司ヶ谷文化の中心で社会運動家の秋田両雀等に加え、戦後の三島由紀夫・吉村昭など学習院に縁の深い人々も含めて紹介したい作家はまだまだいる。

[参考文献：高瀬西帆「群像・豊島の文化人」他]



## 池袋と江戸川乱歩

乱歩が住まいを池袋に移したのは、昭和9年7月のことだった。それまでは引越魔そのもので、出生地三重県名張に始まり、駒込、守口、神楽坂などその数は46回にも及ぶ。それに比例するように、編集者、古本屋、支那ソバ屋、東京市吏員、レコード音楽会主催など多彩な職歴でもある。

著書『探偵小説四十年』に「芝区車町の家は……土蔵の洋室が気に入って（略）池袋の家にも土蔵がついていた。実はそれが気に入った……地面も広く三百五十坪……大きな門がついていて立派で」とある。池袋への転居はこだわりの土蔵はもちろんのこと、「見栄坊」という性格にかなうものだったにちがいない。当時池袋は空気がキレイで静かだったことも幸いしたようで、乱歩はここをついのすみかとした。ここでは、町会副会長として活躍したり、作家仲間との付き合いをするなど、転職癖や自ら「<sup>わがまま</sup>我儘な嫌いで」「江戸川」という名前を出すのが恥ずかしく」と言うのからみると大変な変わり様を見せている。これら乱歩の人となりについては、子息平井隆太郎氏（立教大学名誉教授）の「父の<sup>はりませ</sup>貼雑帖から」などの文章が興味深い。

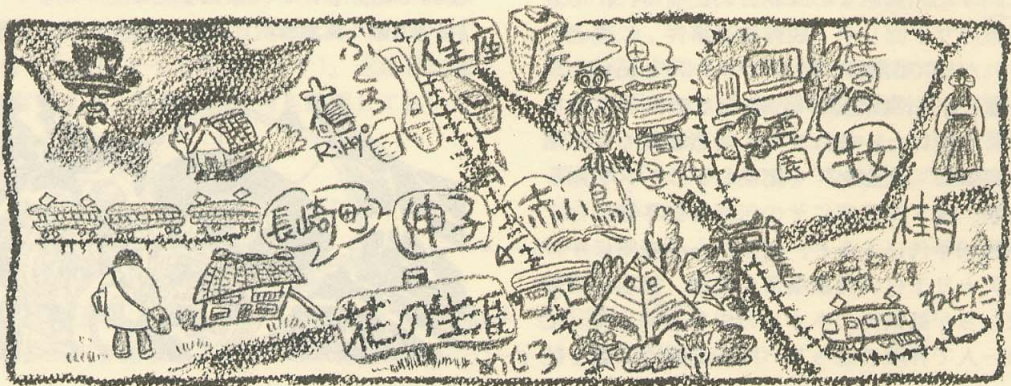
先日、母校・立教大裏にある乱歩邸の前を歩いてみた。門には今なお本名「平井太郎」の表札があり、人通りも少なかったせいか、写真でおなじみの眼鏡をかけた和服姿の乱歩が煙草をくゆらせながら、奥から立ち現れそうな錯覚に陥った。（雑誌係 工藤晶子）

## 百合子と学習院

作家宮本百合子は1899年（明治32年）東京小石川に生まれた。父は慶応義塾図書館の設計等で知られる高名な建築家中条精一郎。母は、華族女学校（学習院）の卒業生。外祖父は、明治前半期における国粹主義の論客であり『日本道德論』の著述で知られる学習院長西村茂樹先生。さらに、最初の夫は女子学習院で英語を教えていた荒木茂先生と、意外にも百合子と学習院とは縁が深い。

百合子は、大正7年、19才の時、父親に同行し渡米。コロンビア大学の聴講生となり、古代東洋語専攻の留学生であった荒木先生と知りあった。周囲の反対を押し切って結婚したそのいきさつは小説『伸子』に詳しく書かれている。大正10年荒木先生は女子学習院の講師、11年には専任教師になった。その時提出した履歴書は、戦災をまぬがれ「女子学習院進退禄」という事務文書の中に今も保存されているそうだ。『伸子』が高い評価を得るにしたいが、荒木先生が学者としての業績、教育者としての実績、あるいは人間性を正当に評価される前に、百合子の夫、『伸子』に登場する佃のモデルとして厳しい見方をされているのは、残念なことだ。

大正13年百合子は、荒木先生と別れソビエトに旅立った。帰国後に待ち受ける激動の時代を百合子がどのように生き、どのような社会の実現を目指したのか考えながら、百合子が住んだ目白3丁目の辺りを歩いてみてはいかがでしょうか。（高等科図書室 中村清子）





## 永青文庫

本校より徒歩20分、細川家の下屋敷があった目白台に永青文庫はたたずむ。

細川家は室町・管領家から出て、3代目より肥後熊本・52万石の外様大名として幕末に至った700年の伝統を持つ。茶人としても有名な2代目・忠興(三斎)や妻・ガラシャ夫人を思い出す方も多いただろう。1950年、美術収集家でもあった16代当主護立氏<sup>もりたつ</sup>によって文化遺産の散逸を防ぐ為に財団法人・永青文庫として誕生、1973年に登録博物館となった。

以上の歴史を持つ「文庫」の所蔵品は、南北朝～幕末の大名道具と護立氏収集品(墨跡、近代日本画、仏像)に大別され、年4回の企画展示が行われている。現在の建物は1934年、細川侯爵の家政所(事務所)として建設

された、昔の武蔵野がしのばれる木々に囲まれたコンクリートの西洋館。1階：受付、事務室。2階：第1展示室。3階：第2展示室。

本校から最も近い美術館として、休講の折など、在学中1度は散歩がてら行ってみる価値がある。また、館の裏手には日本式回遊の新江戸川公園(入園無料)がある。かつては細川家3万坪の敷地の一部であった、この公園にも立ち寄る事で、昔日の雰囲気を一層味わう事ができよう。〔文京区目白台1-1-1 ☎03(3941)0850 <開館時間>10:00~16:00 <休館日>第1・3土曜、日曜 <入館料>500円 学生割引あり〕(哲学専攻M1年 高杉志緒)



木立の中にたたずむ文庫

## 書物の風景

35

1492年コロンブスの新大陸発見から500年というので、彼をめぐる話題がかまびすしい。その航跡をなぞる至近な著作が、バルトロメー・デ・ラス・カサス作の航海日誌である。日本では岩波文庫から『コロンブス航海誌』として訳出されている。これは彼の第1回目航海の日誌を同行の神父ラス・カサス  
~~~~~  
が要録したもので、現存する唯一の記録である。

「8月3日、金曜日の8時にサルテスの川口から出帆した。陸からの強風を受けて、日没までに南へ60ミリヤを進み、その後カナリア諸島への針路をとって、南西及び南微西へ向った」と始まる静かな口調は、かえって以後の波瀾万丈を予感させて心躍る。文体は簡潔、よどみがない。むしろ、訳注の方が

## コロンブス航海誌

隠された事情を物語って興味深い。

例えば、日誌は実は2通り書かれ、乗組員への公開用は実際の航程より短く記載されたとか、不安を抱く乗組員たちが夜陰に乗じてコロンブスを海に放りこみ、海に落ちたことにしようとして企んでいたなど、さもありませんの面白さだ。加えて、ゴメラ島でのベアトリスとの恋物語に至ってはもう海洋冒険活劇のそれ、肖像画でみる彼女の美貌<sup>びぼう</sup>はつとに名高い。

~~~~~  
もし、マルコ・ポーロの言う「黄金の国ジバング」へコロンブスが到達していたとしたら……、歴史に運命を重ねてみるのは楽しい。「事実は小説より奇なり」という言葉を思い出すにふさわしい書になろう。

<請求記号：081.2-33-533(岩波文庫)>

(和書係 霧島浩一)

## 参考室あれこれ

「18世紀に刊行されたフランスの新聞を探しているのですが……」と依頼を受けた。新聞名は特定せず、できるだけ多くの新聞をみたいとのことである。

フランス革命のコレクションとして有名な専修大学の「ミッシェル・ベルンシュタイン文庫」の名前が浮かんだ。さっそく問い合わせしてみると、新聞は500件近く所蔵しており閲覧は可能であるという返事を得た。その数の多さにびっくりしたが、後でフランスの新聞について調べた資料に「フランス革命の始まった1789年には新聞発行は自由化し、この年だけで250紙が創刊さ

れ、同年創刊の『Journal des débats』は第二次世界大戦の初期まで発行」とあったのでうなずけた。ちなみにこの新聞は慶応義塾大学で所蔵しているようである。

また、1777年に最初の民間の日刊紙『Journal de Paris』が創刊されているが、これは日本大学法学部が所蔵している。国立国会図書館では官報である『Gazette de France』や『Moniteur』をその創刊号からの所蔵を含め4紙ほど所蔵が確認されている。この他にフランス革命のコレクションとしては、一橋大学のフランス革命資料コレクション、横浜国立大学のミラボーコレクションがあるときいている。

(参考係 甲斐静子)

## 図書館員のイメージ

昨年、高い視聴率を得たテレビドラマに、図書館で働く若い女性を主人公とするものがありました。同じ立場にある者として、私も少なからぬ期待をもって、ドラマの展開に注目していました。が、回を追うにしたがって、ヒロインの職業などはすっかり忘れ去られていき、私の期待はもの見事に裏切られたのでした。製作者がヒロインを図書館員とした意図は、はっきりしています。動と静、陽と陰、明と暗——こうした対象をより際立たせ、ひいてはヒロインの性格をも示唆しうる職業として、図書館員をとらえていたからです。近年、図書館が身近な存在になりつつあるとはいえ、図書館員のイメージに変化がないことを、この 트렌ディー・ドラマははからずも教えてくれました。カウンター前にはパソコンが並ぶなど図書館の世界にも機械化の波が押しよせている今日このごろです。それなのになぜでしょう？——伝統的なイメージにふと反発したくなった私のつぶやきです。(法経図書室 奥富美智代)



## お知らせ

### ○返却期限、忘れていませんか？

冬休みの長期貸出を受けた本の返却期限は1月12日(火)から21日(木)までの間です(借りた日によって異なります)。返却日に遅れないよう、利用証の日付を確認しておいてください。

### ○試験シーズン到来！

学年末試験の季節です。図書館が1年中で

一番混み合うのがこの時期。必要な資料は早めに借り、期限がきたら次の利用者にゆずりましょう。

### ○コピー利用もゆずり合いの精神で

試験期はコピー機の利用が急増します。独占せず、お互いにゆずり合いましょう。図書館でコピーできるのは“本学所蔵の図書・雑誌”のみです。

来ぶらり No.40 1993年1月1日発行

発行責任者：片瀬 潔 編集委員：田村節子 石田京子

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎03(3986)0221